



## 生徒たちのために今できることを

流山市立おおたかの森中学校長 おおしま 大島 さゆり 小百合



### 1 はじめに

本校は、流山市の中央部、つくばエクスプレスと東武アーバンパークラインが交差する流山おおたかの森駅の近傍に所在し、周辺は区画整理事業により急激に人口が増加している地域である。この地におおたかの森小学校と小中併設校として、平成27年度に開校し、今年で開校6年目にあたる。人口増加に伴い児童生徒数も増え、中学校においては現在通常学級18学級、特別支援学級2学級、全校生徒643名である。また、小中学校内には、地域交流施設「おおたかの森センター」と「流山市立子ども図書館」も複合施設として併設されており、児童生徒だけでなく、多くの市民が訪れる場所となっている。

周辺地域は、人口増加に合わせて、新しい施設や道路が現在も整備中であり、車の往来も増えているため、地域での通学路の見守りはとてもありがたい。地域や保護者の方と児童生徒とが毎日あいさつで交流する姿にはとても温かさを感じている。

### 2 生徒たちのために今できることを

#### (1)新任校長研修から

昨年、新任校長研修を受講し、教育課題や危機管理、管理職に求められる力など、講師の先生方から多くのことを学んだ。また班別協議では、各学校の実態はそれぞれ違うが、校長としての思いをどのように職員に伝え、チーム力をどのように高めて学校経営をしていくかということを共有でき、とても良い刺

激をいただいた。コロナ禍で先が見えない中、生徒たちの安全を確保しながら教育活動を進めていくにあたり、昨年の研修で学んだことは非常に大きかったと改めて感じている。

#### (2)学校再開にあたり

学校再開当初、生徒たちに以前の賑やかさがあまり見られなかった。少しでも早く、子供らしくはしゃいだり、仲間と共に考えたり、楽しく給食の時間を過ごしたり、伸び伸びと活動させたいと思った。そこで、教職員には次のようなことを伝えた。

○感染予防に努めながらも、生徒たちに必要なことや今できることを実行していこう。今だからできることもある。

○様々な行事や部活動の大会が中止になったが、このまま「今年は何もできなかったね」ではなく、「今年は今までにないことができたね」と振り返ることができるようにしよう。

○みんなで知恵を出し合って、工夫していこう。一人で新しい試みにチャレンジするのは負担だが、みんなでやれば楽しい。

みんなで知恵を出し合って、今できることを考え実践してみようということは、生徒たちにも伝えている。教師が様々な場面で、生徒たちの活動を仕組んでいくことを期待しているところである。

#### (3)研修の取組

本校の研修テーマは「主体的・協働的に学ぶ態度の育成を目指した授業改善～充実した言語活動・振り返り活動を通して～」である。

昨年度のうちに設定したテーマであったため、年度当初に研究主任と再度研修テーマについて確認をした。研究主任からは、「感染予防の観点から生徒のグループ活動やグループ討議などは避けなければならないが、他の有効な授業スタイルをみんなで考えていくことができれば良い研修になり、授業力向上につながると思うので、テーマは変えずに取り組みたい」との考えが出された。休校期間の学習を取り戻そうと、ただ教え込むだけの講義式の授業になってはいけない。授業の充実を図るためには、私もそのままの研修テーマで取り組むことが良いと考えた。現在、机を離れたグループ活動のスタイルや、タブレット端末を活用して意見交換をするなど、新しい試みが見られている。



机を離してのグループ活動



タブレット端末の活用

#### (4)オンライン講演会

2学年では今年度、総合的な学習の時間においてSDGsについて学び、実践につなげようという取組をしている。その一環で、SDGsについての啓発授業として、オンライン講演会を実施した。講師は「国際NGO 難民を助ける会」で総務・人事統括をしている方で、難民支援や国内の被災地支援について

詳しく教えていただいた。当初は本校体育館で直接お話を伺う計画であったが、学年6クラスの生徒全員が集まることはまだ避けようと判断した。そこで、Web会議システムを使って講演会を行うことにした。講師の先生はオフィスから、生徒たちは自分の教室から講演会に参加である。各教室のタブレット端末をつないだテレビ画面には、講師の先生と6クラスの各教室の様子が写っている。講師の先生は、画面越しに生徒たちの反応を確認しながらお話をしてくださり、とても和気あいあいとした雰囲気だった。また生徒からは、教室なのでメモが取りやすい、広い体育館より講師の先生の顔がよく分かる、講師の先生と質疑応答ができる、自席にいても他クラスの様子が見えるので学年みんなで講演会に参加している実感が持てるなど、良い点がたくさんあげられた。この講演会に向けて、事前にシステムを確認するなどの作業が重要であったが、学年職員全員で準備を進め、初めての試みの講演会をスムーズに実現することができた。



Web会議システムを使っての講演会

### 3 おわりに

コロナ禍の中にあって、様々な対応が求められている。その時々で適切な判断をするために、生徒、教職員、保護者、地域などの状況を正確に把握し、その情報を基に「生徒のためにどうすべきか」ということを第一に考え、対応していきたい。



## 地域・学校の特性を生かす 学校を支える ～自分らしさを発揮できる児童の育成を目指して～

勝浦市立勝浦小学校教頭 しおだ 塩田 しげつぐ 茂嗣



### 1 はじめに

本校は太平洋を見下ろす高台に位置する。勝浦小のよいところを児童に尋ねた時、「海が見える教室で勉強ができる」と聞いて感動したことを鮮明に思い出す。有数の水揚量を誇る勝浦漁港と約400年続く朝市を学区にもつ。近年、統合により学区は田園地帯まで広がり、豊かな自然と活気あるまちの中で児童は活発に、のびのびと育っている。

職員は、本務者23名のほか用務員、特別支援教育支援員、スクールカウンセラー、スクールサポートスタッフが配置されている。各年代別にバランスよく構成され、若手職員の躍動感と中堅層以上の職員の安定感がかみ合っている。

地域・学校の特性を生かして、児童の学びを充実させ職員が教育活動に専念できる環境をつくることを、教頭職を務める上での私の基本としている。新型コロナウイルス感染症拡大のために、今年度はやむを得ず内容を縮小したものもあるが、平時における取組としていくつかを紹介させていただく。

### 2 学校の強みを生かす

本校は、長期研修経験者や英語教育推進リーダーを務める教員など、人材に恵まれている。また、地域で子供を育てていこうと、関係機関やボランティア団体が支援体制を整えてくれている。これらの資源を生かした本校の取組から三つを挙げる。

#### (1)食と健康教室

勝浦の恵みを味わいながら食育の推進を図る「食と健康教室」は、各学年の大きな行事の一つである。1学年は、親子で給食を食べながら箸の持ち方やマナーを学ぶ「親子給食会」。2学年は、生活科で育てた野菜を使ったピザをつくる「夏野菜ピザ」。3学年は、おいしく食べながら3大栄養素をバランスよく摂る工夫を学ぶ「具たくさんスープカレー」。4学年では、ひじき生産者から話を聞き地産物について考える「ひじきの磯煮」。5学年では、地域の伝統料理に触れる「太巻き寿司づくり」。6学年では、海女や漁師が体を温めた歴史を感じる「勝浦タンタンメンづくり」。いずれも保健福祉センター、給食センター、ひじき生産者、食生活改善会、調理師会、勝浦タンタンメン船団から招いたゲストティーチャーとの触れ合いを通して、食に対する健全な感覚と郷土への愛着を育んでいる。

#### (2)若手教員研修チーム

教職経験年数10年未満の教員7名を「若手教員研修チーム」として校務分掌に位置付けた。ベテラン層職員から各教科等の指導技術や学級・学年経営などについて講話を聞いた授業研究を行ったりして、指導力の向上を図っている。

特に、外国語科がスタートした今年度は、推進リーダーの授業を参観し、その後の協議会で指導のポイントや評価の方法について学んだ。他の教科や特別支援教育についても、長期研修経験者から貴重な助言をもらっている。

る。その学習内容がどのような意義をもつか、児童の思いをいかに学習問題まで高めるか、振り返りを次の学習にどうつなげるかなど、充実した内容である。

チームのメンバーは、数年後には学校の中心になる。教科等の指導力だけでなく、調整や段取り等の、チームを運営していく力も身に付けていってほしい。チームのリーダーには、教務主任や講師を依頼した職員と日程や内容の調整をしたりチームの中でも若い職員の相談にのったりすることを期待している。

### (3)放課後学習クラブ

地元の子供たちの健やかな成長に資する趣旨で、平成23年にボランティア団体「勝浦の教育を支援する会」が発足した。本校は、学習が遅れがちな児童への補充指導をお願いしている。年間十数回、放課後に1時間程度児童を指導していただく。地域の方々なので、児童とすぐに関係を築き、細かい打合せをせずに学習を始めることができる。指導を受ける児童も心待ちにしており、絶大な信頼と安心がある。

## 3 学校の課題に応じる

本校児童の現状とこれからの「予測困難な時代」から、本校の課題が見出せる。今年度から始めた取組から二つを挙げる。

### (1)書く力の向上

全国学力・学習状況調査の結果によると、本校の児童は書く力が弱い。そこで、8時10分から15分間行っている朝学習に書く活動を取り入れることにした。学力向上推進委員会で具体的な内容を検討し、教材を用意して現在取り組んでいるところである。

### (2)ICT教育の推進

ICTを活用した学習・授業の充実は急務である。ICTが職員により身近なものになるよ

うに職員研修を企画した。家庭学習への活用や協働的な活動を取り入れた授業づくりなどについて学び、高学年から実践を試みている。

## 4 教育活動に従事するための業務改善

これまでに述べた取組を行うには、それに従事する時間が必要である。本来の業務に集中できる時間をつくるためにいくつかの業務を見直した。

### (1)学校徴収金等の自動引き落とし

現金で集金していたが、昨年末に近隣の金融機関に相談し、保護者の理解と協力を得て、自動引き落としの手続きを行った。各教室で見られた朝の集金風景は、朝学習に集中する風景になった。

### (2)職員打合せの日時の移動

職員の打合せを課外活動のない月曜日と木曜日の放課後に移動した。朝、学級担任は教室で児童と挨拶を交わし、そのまま朝学習、朝の会へと進む。落ち着いて一日をスタートさせている。併せて、職員への連絡事項は、校務PC上で共有する掲示板と職員室に掛けられたホワイトボードで周知できるようにして、打合せ時間の短縮を図っている。

## 5 おわりに

「強み」「機会」等を把握して方向性を見出す手法を研修で学んだが、強みを生かした取組、課題に応じる取組、業務改善は、ばらばらではなく互いに関連し補い合うことで機能するのだと実感している。大切なのは、児童・職員・地域の目線に立って現状・課題を的確に捉え、地に足の着いた手立てを考えることである。これからの社会において、児童が自分らしさを発揮して毎日を送れるように、考え、校長の指導を仰ぎ、判断力と実行力を磨いていきたい。



# 主幹教諭としての自分自身を 振り返って

船橋市立船橋中学校主幹教諭 かねさか 金坂 たくじょう 卓城



## 1 はじめに

本校は船橋市の中心部に位置し、全校生徒数が1,083人（令和2年5月1日現在）の大規模校である。その中で、私は主幹教諭、学年主任として2年間を過ごしてきた。

## 2 主幹教諭としての「姿勢」について

主幹教諭となって、教職員のミドルリーダーである立場を理解し、今まで以上に他の教職員の模範となるように意識している。主幹教諭は、指導・助言・指示する立場である。信頼される人間でなければ、思いがあっても伝わらない。そのためにも、日頃から言動に気を付け、広い視野を持って学校全体に目を向け、どんな教育課題に対しても積極的に取り組んでいる。

## 3 職場の「つなぎ役」について

### (1)管理職と教職員のつなぎ役として

- ①主任会、運営委員会の情報周知を目的とした供覧文書を作成し、回覧する。
- ②部活動担当者の意見を集約し、管理職へ具申する。
- ③働き方改革について、業務のペーパーレス化等を具申する。

### (2)教職員間のつなぎ役として

- ①校内各学級を巡回し、把握した生徒の状態や教室環境等について、関係職員に伝え、共有する。
- ②各種相談に対して、関係教職員を集めて、意見交換の場をセッティングする。
- ③新規採用教職員への積極的な声掛けと気が付いたことへのアドバイスをする。

上記のように、誰とでも良好なコミュニケーションをとり、経験年数や年齢にとらわれず、

教職員一丸となって教育活動に取り組める環境づくりに努めている。

## 4 若手教員の「育て役」について

私は、日頃から若手教員の思いや考えを引き出すことを心掛けている。そして、チャレンジしてみたいことがあれば、実現できるようにフォローしている。

### (1)休みがちな生徒の相談例

- ①生徒の状態を考慮し、どのような対応をしたいか、まず話を聞く。
- ②生徒指導主事や関係する教員を交えて、組織的に対応できるように調整する。
- ③若手教員には、校内体制を整備した上で実行に移してもらう。

### (2)その他の取組

- ①若手教員の副担任に配置されたベテラン教員をサポートする。
- ②若手教員の通知表や学級通信の文章を指導する。
- ③教育に関する講座を積極的に紹介する。

今後は、教務主任や研究主任と連携して、授業研究会の開催を検討している。良い点を積極的に認め、持てる力を最大限伸ばしたいと考えている。

## 5 おわりに

今まで“すぐにできる当たり前のこと”にまずは精一杯取り組んできた。学年主任を兼務している良さは、管理職、教職員両方の声を聞きやすいことだととらえている。しかしながら、学年の仕事に偏りがちになってしまいうこともある。管理職を補佐していくために、まずは、地域との連携について力を尽くしていけるよう、管理職と相談していきたい。



## 話すことの大切さ

館山市立館山幼稚園教諭 おおすな まみ 大砂 真美



昨年度、4歳児の担任になり、初めての学級経営に大きな期待と不安を感じていた。始めは、自分の伝えたいことが十分子供たちに伝わらず、学級全体に上手く指示を出すことができなかった。子供が動きやすいような言葉で伝えられなかったり、子供を注目させるような話し方ができなかったりと、日々自分の力不足に悩んだ。

その中で、初任者研修で学んだことは「話し方」の大切さだった。指示の内容によって声に抑揚をつける。要点を簡潔にまとめて、子供にわかりやすい言葉で伝える。さらに、手遊びや言葉遊びを取り入れ、子供が教師の話を聞きたくなるような雰囲気作りができるように自分なりに取り組んだ。年度当初の私の学級では、活動の準備にとっても時間がかかっていたが、話し方の工夫をすると、学級の子供たちが少しずつ次の活動に意識を向けるようになり、「今日はどんな手遊び?」「昨日のゲームしよう。」など、進んで集まってくるようになった。子供たちが活動を楽しみにしながら取り組む姿を見て、改めて話し方を工夫する大切さや子供と関わる楽しさを実感し、とてもやりがいを感じた。

現在、5歳児の特別支援学級の担任をしている。日々、個々の課題に応じた支援を行う中で子供一人一人の特性を理解し、子供の思いを感じ取りながら、活動しやすい言葉かけを心がけている。今後も子供たちを惹きつけられるような自分なりの「話し方」を目指していきたい。



## 子供たちの思いをくみ取るために

県立夷隅特別支援学校教諭 どばし ゆうじ 土橋 雄次



教諭として2年目を迎え、この仕事に対してより「責任」を感じている。それは、学級担任としての責任、学部では総合的な学習の時間のチーフとなり授業の計画実施に伴う職員間の連携や授業づくりへの責任等、1年目では感じなかった重圧に直面しており、正直不安である。その反面、この責任ある教諭という仕事に感謝と喜びを感じている。

本校では、「なぜ、何のために」というテーマで授業づくりに取り組んでいる。初任の時はよく分からず、「なぜ、何のために」を考えれば考えるほど迷うばかりであった。ある授業で中学部の生徒が「僕はこの授業が好きなんだ。だから早く授業がしたい」と言った。この言葉を聞いて、私は迷っていた自分から解放された気がした。大切なのは、子供たちがどんなことに興味をもち、どんなことをしたいかという子供たちの思いをくみ取ることなのだと気付いた。

私一人ですることは限られている。障害のある子供たち全員の思いを実現させる授業を行うことは難しい。必要なのは、先生方とチームで取り組むことである。初任者研修でも学んだチームという言葉の重要性を昨年度以上に感じ、これからも先生方と共に協力していきたいと思う。そして、子供たちが授業で成長するように私も成長していきたい。



# キャリア教育の視点を取り入れた 理科学習

大網白里市立瑞穂小学校教諭 <sup>いしい</sup>石井 <sup>ちえこ</sup>知愛子



## 1 はじめに

平成29年度に長期研修において「キャリア教育の視点を取り入れた理科学習」について、1年間研修を進めてきた。その際、課題解決へのアプローチを考えたり、話し合うことで友達と関わりながら自分の意見を決定し確かめていこうとしたりする問題解決学習の過程は、キャリア教育の視点を取り入れた理科学習として、うまく機能するのではないだろうか、と考えた。本稿では、問題解決学習を通じて、思考し表現する力を養っていく中で、自分自身が研究を進めるキャリア教育の視点を取り入れた授業実践について述べていきたい。

なお、今回の実践の中でキャリア教育の基礎的・汎用的能力の育成の視点に関わる部分を（ ）内に明記した。

## 2 授業実践

第5学年 理科  
单元名「ふりこの動き」  
(大日本図書 5年)

### (1)導入の工夫

单元導入の際、一人一人にワッシャーと糸を配付し、ふりこを自作させ、「ふりこの長さ」や「ふれはば」等の言葉の意味を確認した。まるで催眠術師になったかのように自作のふりこを振る姿に、児童がその動きに興味関心を抱いたことを実感することができた。また、

「ふりこを速く動かしたい。」という思いやつぶやきを学習課題に設定し、「ふりこの動きを速くするにはどうしたらよいだろうか」という問いに対し、「重くすればいい。」や「大きく振ればどうか。」といった様々な予想が生まれた。(課題対応能力)

### (2)話し合いと実験

①ふりこの振れ幅を変える。

図1を示し、「ふりこの振れ幅を変えると、ふりこが往復する時間はなるだろうか。」という学習課題で話し合いを行った。

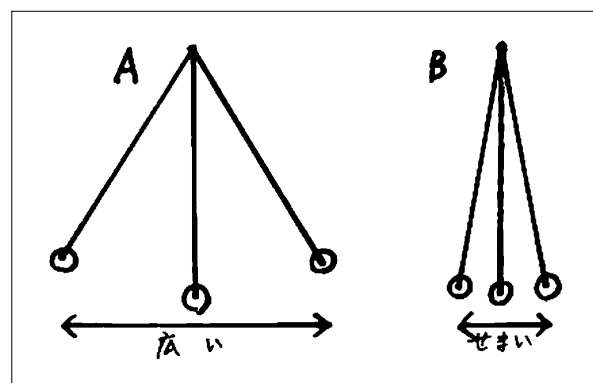


図1

全ての児童が、話し合いに参加できるよう、予想は「ア：Aの方が時間がかかる」「イ：Bの方が時間がかかる」「ウ：AとBは同じ時間がかかる」「エ：その他の考え」の選択肢を与えて挙手させた。自分の考えを決定させる場面を設定し、なぜそう思ったのか根拠について話し合うことで、主体的に参加する気持ちをもたせるように心がけた。

児童の予想は分かれ、活発な話し合いをすることができた。「ブランコは大きく揺らした

方が勢いがついたからアだと思う。」や「Bの方がふりこが動く距離が短い。走るとき距離が短い方が時間もかからない。」のように自分の経験から、予想の根拠を述べる児童が多かった。また、「なんとなく。」のような感覚的な根拠も認めていくことで、安心して話合いに参加できるようにした。(人間関係形成・社会形成能力) お互いの意見を聞き合いながら、自分の意見を変更してもよいことを伝え、実験前に予想の最終確認を行った。(自己理解・自己管理能力) こうすることで、実験を自分の予想を確かめるために行うという意識をもたせることができた。



天井から吊したふりこで実験する児童

実験は、本校に大型のふりこ用の実験器具があったため、そちらを使用し、演示しながら一斉に行うこととした。往復回数を数えさせ、ストップウォッチを止めるタイミングで「ストップ」のかけ声を言わせることで、実験から気持ちが離れないようにした。「ストップ」のかけ声がそろそろと一体感が生まれ、温かい雰囲気にも包まれた。(人間関係形成・社会形成能力)

結果からふりこの等時性が判明する。予想が的中して喜ぶ児童と、外してしまい悔しがる児童がいたが、いろいろな意見について、みんなで一生懸命思考する時間ができたことを称賛した。また、誤った予想だったとしても、友達が「なるほど、そうかもしれないな。」と感じる説得力のある意見が多かったことを

認め、自分の考えを表現する大切さに気付くことができた。児童の感想の中に「やってみないとわからないと思った。」という記述もあり、実験をして確かめていく楽しさや、実験をすることの意義について考える児童も多かった。(キャリアプランニング能力)

②ふりこの重さを変える。

「ふりこの重さを変えると、ふりこの往復する時間はどうなるだろうか。」の学習課題で話し合った。

③ふりこの長さを変える。

「ふりこの長さを変えると、ふりこの往復する時間はどうなるだろうか。」の学習課題で話し合った。

②③の課題も、①と同様に予想の選択、話合い、実験、まとめを行った。児童は、学習パターンを身に付け、前回の実験結果を反映させたり、生活経験を基にしたり、感覚的に考えたりしながら話合いを繰り返すことで、課題について思考し、自分の考えを表現することができた。その上で、実験結果に一喜一憂しながら、ふりこの性質を捉えていった。

### 3 おわりに

本校は、つまずきや誤答を扱った話合い活動に取り組んでいる。理科の授業でも予想と異なる結果を生む実験を体験することで、「なぜそうなるのだろうか」「どうしたらよいのか」と真剣に思考するようになるだろう。そして、その考えを表現し合う授業を進めていくことで、生きて働く思考力、表現力を育んでいけると考える。

これからも、問題解決学習の中で、キャリア教育の視点を取り入れた授業実践を進めていき、児童の思考力や表現力を高めていけるよう、研鑽を積んでいきたい。



## 主体的に学ぶ生徒を育む 外国語授業

印西市教育センター指導主事 のはら さとし 野原 智



### 1 はじめに

成田市と印西市の中学校3校の勤務を経て、今年度から印西市教育センターに異動となった。授業ができないもどかしさを感じながらも、これまでの私の実践を市内の先生方に伝達したり、先生方と一緒に英語教育について考えたりすることで、これまでどおり生徒たちのために尽力しているところである。

私がこの数年間で心がけたことは「主体的に学ぶ生徒を育む」ことである。授業で生徒に内発的動機づけを与え、生徒が自分から学習するようになれば英語力を向上できると考えているからである。ここでは、このことに関する私の拙い実践を紹介する。

### 2 授業実践

#### (1) 帯活動を通じた心の土台作り

「授業のスタートはつかみが大事」という言葉をよく耳にする。授業開始と同時に英語を使う楽しさを感じることができれば、自ずと「自分は英語を話せる」、「もっと英語を使いたい」という気持ちが生まれ、英語学習に対する心の土台が作られると考える。心の土台が作られれば外発的動機づけではなく、純粋な英語への興味から、英語学習そのものを目的として自発的に学習する動機づけが得られる。では、英語を使う楽しさを与えるにはどうしたらよいのか。そこで力を入れたのが帯活動である。意識したことは、何度も繰り返し活動させることで達成感を感じさせることである。また語彙・表現の正確性を磨かせ

て、更に動機づけを高めることを意識した。以下に、授業の始めに行った帯活動の実践例を挙げていく。

#### ① ショートスピーチ

マッピングを使って1～2分のスピーチを行う。マッピング作り、ペアワーク+Q&A、発表、ライティングのステップを設定した。

#### ② ペアチャット

トピックを毎週変えて1～2分のペアチャットを行う。会話を続けるテクニックの指導を行いながら、ペアワーク、発表、ライティングのステップを設定した。

#### ③ ピクチャーディスクリプション

配られた絵の説明をする。考えの準備、ペアワーク+Q&A、絵を交換してペアワーク、ライティングのステップを設定した。

#### ④ ミニディベート

小グループで、既習の教科書のトピックについて意見交換をし、同意・反論する。考えの準備、教材からの情報収集、ライティング、アイデアの共有、ペアチャット、ミニディベートのステップを設定した。



ペアチャットの様子

その他にも、既習のレッスンを、絵を使って自分の言葉で説明するストーリーリプロダクション、数十枚のカードを短時間でできるだけ多く説明する活動、ペアでスキットを作

る活動などを行った。難易度も考慮しながら、生徒が粘り強くタスクに取り組むことで達成感を得られるように工夫した。その結果、英語をもっと使いたいという欲求につながり、生徒に効果的に動機づけをすることができた。

## (2)パフォーマンステストの設定

生徒に動機づけを与え、更に達成感を持たせるためにパフォーマンステストを工夫した。このテストはもちろん評価のために行うが、それ以上に生徒の心に火をつけるための指導として行った。方法は全員の前での発表、ALTの前での発表や会話、ビデオやICレコーダーの前での発表など様々である。内容は、基本的には帯活動や授業内の活動で慣れ親しんだ活動を発表させた。授業で十分に練習をしてきた成果を発表するため、多くの生徒が達成感を感じていた様子であった。また、即興力を磨くため、慣れ親しんだ活動だけでなく、チャレンジ課題を課すこともあった。テストの工夫については以下のとおりである。

### ①テストの早めの予告と評価規準の説明

パフォーマンステストの内容と評価規準を数週間前に予告すると、多くの生徒は自主的に練習をする。辞書を使って表現を工夫したり、表現を覚えてジェスチャー等を工夫してきたりする生徒が多かった。もちろん自宅で練習しない生徒もいるが、帯活動や授業内で行っていることがテストにつながるとわかっているので授業に必死に取り組んでいた。達成感を重ねると「また次もがんばろう」と意欲を見せ、発表がうまくいなくて涙を見せた生徒は「次こそやってやる」という気持ちになり、心に火がついた様子であった。

### ②上級生の発表を動画で見せる

ただ「スピーチを発表してください」と言われても、どんな発表をすればよいか生徒はイメージがつきにくい。そこで上級生が過去

にどんな発表をしたのか映像を見せる。すると生徒は目標となる発表をイメージし、それを越えようと努力する。身近な存在の上級生の発表は、大きな刺激となり、練習意欲をかきたてることにつながる。

### ③振り返りのフィードバック

発表後の感想を見ると「英語を忘れてしまった」「思うように話せなかった」など、内容が漠然としていることが多い。課題を明らかにすることが次へのステップにつながるため、教師が振り返りシートに、どうすれば目標を達成できるかを具体的に書いて伝える。特に褒めたたえる



パフォーマンステストの様子

フィードバックは生徒のやる気を引き出すのに有効であり、次の発表を更に良くしようと練習に励むようになる。

## 3 おわりに

以上の実践を通じて、主体的に学ぶ生徒の育成に取り組んできた。授業で心の土台を作り、心に火をつけ、自分から英語学習に取り組む習慣を身に付けさせることが、生涯にわたって継続して外国語習得に取り組もうとする態度につながると考えている。

今後も帯活動の関連性、言語の使用場面や働きなど、研究を深める必要がある。先生方との連携・情報交換を図りながら今後も印西市のみならず、千葉県、全国の生徒たちのために尽力していく所存である。